

茶の湯 文化学会 会報

第117号 / 2023年6月26日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

No.117

聚楽法印と聚楽法印流の謎

岡 宏憲

題目から聞き馴染みのない人名と流派が出てきたことをお詫び申し上げます。聚楽法印については本学会誌の二号にて翻刻された『古今茶道全書』に登場するが、とりわけ聚楽法印流に関しては研究史上としてもおそらく新出であり、未だ取り上げるには種々の問題が多く、今回の会報に寄稿すべきか判断に迷った。しかし一方で情報があまりに過少で、研究調査の先行きが見えないため、本学会員にあまねく情報公開し、助言を求めさせて頂きたいとの思いで筆をとらせて頂いた。そのため粗放な内容であることを予めお断りしておく。

まず聚楽法印については、林家辰三郎氏が「紹鷗の師匠」として

「発見」されてから既に半世紀を超え、未だに詳細が明らかにされていない謎の人物である。その後、戸田勝久氏や米原正義氏が取り上げているため、人物の解説は『古今茶道全書』と三名の論考の一部を引用することで代えさせて頂きたい。

・『古今茶道全書』（『茶の湯文化』二号、一九九五年）※傍線部筆者

「厥後子聚楽法印紹鷗利休古田氏小堀氏細川氏片桐氏等其ノ流多々也」（P. 84）

「（炭の次第）炭前置合迄紹鷗の茶師駿河法印より伝授の図有之、但書院はこび手前也、勿論上古ノ風也」（P. 99）

「一、右に外題下ニ有通ニ古昔ニきつね川の御所にて小笠原長時公への茶会之時、盆点の一巻聚楽法印の伝受より紹鷗受継たる本式其后数寄屋住居手前風炉の手前利休織部遠州其外色々宗匠連之吟味物数寄至極の宜所一通用目を拾尽、煎つめたる次第ヲ或御大人時の宗匠とも可謂仁ニ執心にて被連置一通也、是を博学物知と云へし」（P. 140）

「本勝手台子ノ盆点の事」「台子ハ聚楽法印ノ式法、以来当世マテ不改」（P. 143）

「○砂浜石庭并路地庭数寄屋図之事
駿河様御代聚楽法印として紹鷗の師匠、駿州府中ニ住居して茶道功者也、見越の富士を庭中の砂浜へ移

し、見へ来て三島に用たる働を名人之作と珠慶法師贊美と申伝ゆ、根源庭の式法に三島一連ンといふ事あり

一、数寄屋鍍の間書院も一連の住居、是以不尋常作意也、後難事有て、高野山にて終られ、依夫世間

に徘徊せず、知る者少なし」(P. 154)

〔聚楽法印作書院庭、富士ヲモ庭中ニ移来テ三島一連ニ築之〕(P. 163)

・林家辰三郎『古典文化の創造』(一九六四年、東京大学出版会、P. 379〜380)

「ここでこの『茶道全書』がとらえた、総合的な茶道の祖は、実に聚楽法印という従前の茶道史においてはまったく看すごされた人物であった。(中略)その位置は現行茶史における村田珠光の位置におかれていて、珠光については語るところがない。(中略)このよ

うな無名未知の人物が、クロウズ

アップされるところに、この著者との特殊関係(おそらくは同郷)ということよりも、現在の流派の由来する茶の歴史系譜をどこかで打破し、新たな茶祖を設定しようという意図がつよくはたらいっているように思われる。」

・戸田勝久『武野紹鷗研究』(一九六九年、中央公論美術出版、P. 174〜175)

「私が紹鷗の造庭の師と判断する、聚楽法印の遺跡をもとめんがため(中略)只私は、紹鷗といふ人は、多くの師たる人物を得た人だと、次第に思ふやうになつた。茶の湯だけでも、宗悟、宗陳、宗理、宗珠、と挙げてくる事ができる。紹鷗はこの聚楽といふ人から、特に作庭を学んだのではないか。(中略)私は乱暴にも聚楽法師とは、宗長(※筆者註・連歌師宗長)ではないか、と思つた。之は明らかに、珍説の部類に属するが、併し、宗長と高野は無縁ではない。」

・米原正義『戦国武将と茶の湯』(一九八六年、淡交社、P. 186)

「武野紹鷗の師という聚楽法印『茶道便蒙鈔』書き入れに「シユラク法印」とある)は、茶の湯開山珠光の位置におかれているが、

どのような茶人であつたか私は知らない。けれども聚楽法印なる茶道功者が架空の人物であつたとしても、その住居を他の戦国大名でなく、今川氏の本拠駿河府中とし

たところに意味はあろう。すなわち今川氏管下に茶の湯が盛行していたことを想見することができるのである。」

一方で聚楽法印流については、筆者が初めて言及する流派である。大いに困っている理由は、その情報源が唯一、筆者の実父より二〇一八年八月に聞いた次の内容のみだからである。

・江戸時代末期、四代前の岡佐助(明治四十五年(一九二二年)没、

享年七十歳)が「聚楽法印流」の家元を四百二十両で購入した

・「聚楽法印流」は書院の茶であつたが、流派は途中で断絶したため、どういふお点前であつたかなど詳細は一切不明である

・岡佐助は聚楽法印流の266代を襲名し、聚楽法印流が存続していたならば岡佐助から四代後の父は272代という

・岡佐助は久留米で家具屋をしており大儲けをした

そうすると筆者は聚楽法印流を再興すれば当代家元になれるが、これを読んだ方々は、研究に行き詰つた筆者が奇説を唱え始めたか、承認欲求にとりつかれた挙句に新流派を創作したか、あるいはその両方かと、おおよそ好意的には受け止められないことは想像に難くない。しかしながら茶道史に疎く、聚楽法印という人物すら知らなかつた父が先祖代々継承した言い伝えを、真実か否かは別にし

て聞書として記録しておきたいという筆者の我儘を許容して頂ければ幸いである。

聞書の内容については、四百二十両という高額な値段もさることながら、家元の権利を売買したという行為自体も疑義が生じる。加えて266代と他流派と比較して尋常ではなく過大な歴代人数も信憑性に欠ける。

無論、今後の研究には当該聞書以外の史資料の発見が必須であることは言うまでも無いが、この限られた情報のみで敢えて積極的な検討を試みるとすると、『古今茶道全書』の刊行は元禄七年（一六九四）であるが、筆者が古書で購入した「茶人系譜」（一八〇〇年代前半成立）の中には「利休居士門人都鄙二貴賤数多ナリト云ヘトモ世ニ知ルトコロノ人々右ニ載ス」として「聚楽法印 紹鷗の師トモ云、駿州府中ニ住」と聚楽法印が系譜外で記載されていることが確認される。また駒井鶯宿（乗

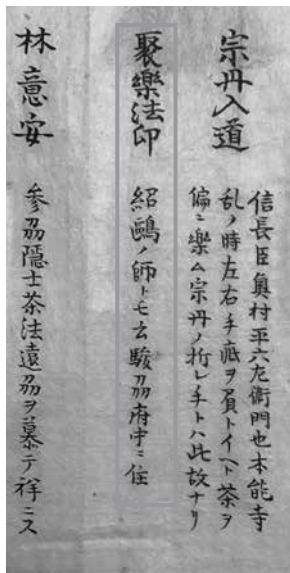
郵）が文化十二年（一八一五）から記しはじめた『鶯宿雜記』においても、『茶話真向翁』（関竹泉著、享和三年（一八〇三）刊行）を引用する形で「茶道系図区々也（中略）茶道全書に聚楽法印―紹鷗―利休」と記されるなど、聚楽法印の存在は江戸時代を通じて徐々に広がっていったのは事実である。（但し、管見の限り、それらは全て『古今茶道全書』より遡ることはなく、同書の流布に起因するものであろう）

すると江戸時代後期には聚楽法印という人物は既に認知されており、それを祖とする流派が江戸や京都から離れた地方に誕生した可能性があり、新興流派であることを秘匿するために歴代の数字を過大に設定したという仮説が成り立たないこともない。とはいえ論拠に乏しいことには変わりがないため、本稿を読んで頂いて何か思い当たることがあれば、どんなに些細な情報でも構わないので提供い

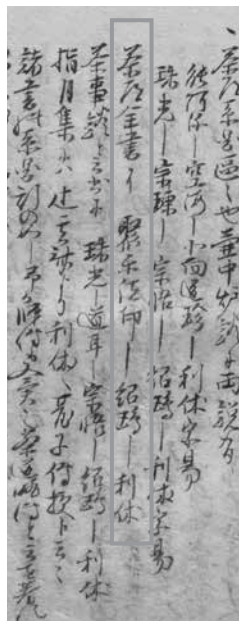
ただけると幸いである。

さいごに、聚楽法印流が仮に過去に実在したとしても、点前・道具・門弟など全てが失われた流派は現存しているとは言い難く、筆者は家元を名乗るつもりは毛頭ないことを宣言しておきたい。（ましてや襲名茶会などは論外であ

る）学会や例会などで筆者を見かけた際、「家元だ」などと陰口をたたかれないことを願うばかりである。



「茶人系譜」
（筆者蔵、四角囲み筆者）



『鶯宿雜記』巻百十三・百十四
（国立国会図書館デジタルコレクション、書誌ID:
000007298970、26/115コマ、四角囲み筆者）

理事会

令和四年度第三回理事会が、令和五年二月二十六日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十五名が出席し、以下の議題について討議された。

一、令和五年度総会提出議案について

・令和四年度事業報告、決算報告

・令和五年度事業案、予算案

二、令和五年度総会・大会について

三、会誌・会報について

四、その他

理事会を始める前に、去る一月二十一日に二代会長倉澤行洋氏のご逝去されたことが報告された。山田副会長の司会進行で議題に沿って議事が始まった。

第一議題では、令和五年度総会提出議案として、令和四年度事業報告・決算報告、令和五年度事業案・予算案について、各担当理事より報告と説明が行われ承認された。

副会長人事に関し、矢野会長より岡本浩一理事の推薦があり、岡本氏からは内諾を頂いた。さらに理事会で承認され、総会の議事項目となった。

第二議題では、令和五年度総会・大会について提案され、承認された。

総会・大会
日時：令和五年六月十日(土)
午前九時五十分より
会場：学習院大学

研究発表：荒井欧太郎氏、廣田吉崇氏、佐々木隆夫氏、倉林重幸氏、シンポジウム：平木しおり氏、依田徹氏、関口敦仁氏、片山まび氏、石塚修氏、谷村玲子氏

懇親会
日時：令和五年六月十日(土)
午後六時より
会場：GINTO池袋店

見学会

日時：令和五年六月十一日(日)
午前十時より
会場：護国寺

解説：護国寺茶寮事務局 伊澤元祐様

第三議題では、会誌について、山田編集委員長より会誌三十九号の進捗状況が報告され、令和五年三月末に発行予定であるとの報告があった。

また二代会長倉澤行洋先生への追悼文を谷見先生に依頼し、会誌四十号に掲載することとなった。

会報について、飯島編集委員長より会報一一六号が制作中で三月末に発行予定であることが報告された。一一六号の巻頭に、倉澤先生への追悼文(影山先生)を掲載し、さらに理事・幹事からも追悼文を募集し、一一六・一一七号に掲載することとなった。

第四議題では、三笠景子会員より「茶の湯の歴史を問い直す」研究会のシンポジウムへの「後援名

義申請書」が提出され、審議のうえ了承された。

東京例会の発表資料(図)が無断転用されたが、発表者からの再三の抗議によって、現在は削除されている。今後、学会側の対応が必要かどうかも視野に入れて、早急に検討していくこととなった。

追悼

前号でお知らせ致しましたが、令和五年一月二十一日、二代会長倉澤行洋先生がご逝去されました。倉澤先生には多くの追悼のお言葉が寄せられましたので、前号に引き続き掲載をさせて頂きま

す。

飯島照仁

「なるようにしかならん、でもなんとかなる」
倉澤先生のご自宅の茶室「無庵」は、先生の好みを所々に生かした

空間でした。ここで研究指導を受けられた方は、数え切れないことでしょう。この茶室で先生は、いつも和服姿でにやかに迎えてくださり、先ず先生自らお茶を点でて、向かい合って共に戴く。それから本題へと進むことが常でした。先生の研究指導には時間制限なし、というのが私の印象です。

あるとき先生が「私はいつか妥協をせず、自分のための好みの茶室を建てるのがしてみたい」と語り、先生と具体的な茶室建築の話を深夜まで議論したことがありました。

ちょうどその頃、先生が伝統芸術の研究者のために教授を務めていた宝塚大学（宝塚造形芸術大学大学院）校舎内に茶室を建てる話を持ち上がったことを、昨日のこのように覚えています。この計画にあたり、茶室建築責任者は倉澤先生が引き受けられ、私も微力ながらお手伝いをさせて頂きました。茶室建築計画作業は、数え切

れない程の会議が行われ、先生は理想の教育理念と理想の茶室空間を掲げて会議に臨まれておりました。しかし茶室建築は、設計計画、予算、施工業者、数寄屋の職方、露地など数々の問題点を一つ一つ解決して進めなければなりません。先生の妥協をまったく許さないその姿を傍らでお手伝いしながら、先生の精神的強靱さを痛感する日々でした。大きな壁に突き当たる度に、先生は「なるようにしかならん、でもなんとかなる」と良くおっしゃられておりました。今でも先生の言葉として私の心に強く残り、以後歩む方向を示唆して頂ける力となっております。

完成された茶室は、裏千家前家元千玄室大宗匠監修となり、二〇〇六年（平成十八）「宝塚造形芸術大学大学院サテライト茶室、高灯軒」が無事に竣工し、茶席披きが盛大に行われました。この茶室は現在でも伝統芸術の授業が行われております。倉澤先生の強い信

念によって竣工されたこの茶室は、先生の意思を継承し、伝統芸術を学ぶ場所として多くの教員・学生達が活用しております。

ここに改めて倉澤洋先生に深く感謝をすると共に、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌

「倉澤先生を偲んで」 八尾嘉男

倉澤先生のお姿を初めてお見かけたのは、茶の湯文化学会に入会する以前、佛教大学大学院修士課程に進学し、ゼミの兄弟子の勧めにしたがって、藝能史研究会の例会、大会に出席するようになったところと記憶している。そして、私の報告のなかでご教示を受け、ほかの方のご報告への多くのご意見を拝聴するようになったのは、茶の湯文化学会に入会し、出席するようになってからである。入会当時の会長は、倉澤先生だった。

私は、文献史学の立場から茶の湯の歴史を考えているので、倉澤

先生の思想史・哲学からのアプローチは新鮮であり、茶の湯文化の懐の広さを知る最初のきっかけでもあった。この学会の名称は「茶の湯文化学会」であるが、学会幹事の役割を拝命し、拡大理事会に出席したおり、「茶の湯文化」ではなく、「茶文化」とするべきだとのお考えを示されたことを覚えているので、ここでは茶文化とした方が良いのかもしれない。

また、私は大会以外では近畿例会に出席することが多いが、近畿例会での思い出といえば、先生が神戸大学をご退官後に奉職された宝塚大学大学院の学生さんが多くご報告され、例会運営に大きく寄与されたことがある。おかげで、おそらくその機会がなければなかったであろう出会いや研究視点を授かった。これは今後も活かしていきたいといけない財産である。

私は、倉澤先生から直接に多くの教えを受けたというよりは、少

し離れたところから温かく見守っていたのだという印象が強い。もう倉澤先生から直接ご意見を賜ることはかなわないが、先生のご研究と向き合う機会はこれからおそらく訪れるであろう。その時は、先生の背筋が伸びた紳士的なお姿や思い出とともに、取り組んでいきたい。

末筆ながら、倉澤先生のご冥福を祈り、筆を置くこととする。合掌。

「馬蝗絆」が示す倉澤先生の学識

岩田澄子

「これがイナゴに見えるという人は、目が悪いのではないか？」

倉澤行洋先生が、小声でぼつりとつぶやいた。

馬蝗絆（ばこうはん）は、平重盛由来という最古の伝承をもつ青磁茶碗である。鉄釘の鏝で補修されており、「あたかも大きな蝗（いなご）のように見える鏝が打たれ

たことよって、この茶碗の評価は一層高まり、馬蝗絆と名づけられた」と説明されている。



東京国立博物館蔵（重要文化財）
（東京国立博物館ホームページより）

先生の一言は、二〇一二年十月の近畿例会で「平重盛伝来の箱書を持つ内金張茶碗（射和文庫蔵）」について発表後の、茶話会でのことである。実は、発表の直前に北京外国語大学の汪玉林教授からも同様の指摘を受けたが、再考するゆとりはなく、「日本人が考える命名の問題」と開き直り、国立博物館の説明通りに発表していた。ところが倉澤先生は、日本では馬蝗は「ウマビル」と訓読されて

おり、ウマビルは日本各地に生息していると指摘する。馬蝗は中国語で蝗（ヒル）のことだったのである。確かに、あの鉄釘がヒルだと知ると、もうイナゴには見えな

い。このご教示のおかげで、東京例会で高橋忠彦先生にもご報告し確信を深めた。そして改めて汪先生より、ヒルが「馬蝗」と呼ばれるようになった経緯や、現在最古の南宋時代の戯曲劇本『張協状元』に「びつたりとくつついて離れない」という意味で「馬蝗」が使われている用例などをご教示いただき、「青磁茶碗『馬蝗絆』の語義について」（当会報75号、二〇一二年十二月）で報告した。

倉澤先生は当初から馬蝗はヒルだと認識し、平成三年（一九九一）に千玄室大宗匠（裏千家流家元十五世）が南開大学で哲学博士号を受賞された際、現地の祝賀会で日本代表の一人として講演した際にも「馬蝗絆」について言及されて

いたという。

その後、「馬蝗」を大きなイナゴとする説明に気づいたが、「あまりにも馬鹿らしいので、きっと誰かが訂正してくれると思つて放っていたら、そのままになってしまった（今さら言えない）」と。

このような経緯で、倉澤先生と汪先生の偉大なご教示を、不肖ながら私が紹介する形となったが、本件により倉澤先生の研究者としての奥深さの一端を垣間見ることができ、改めて心より敬服した。

各地での発表をご報告するたび、先生は「思いが果たせて嬉し

い。これは私のおかげですよ！」と少年のように笑っていらしたのが思い出される。ご冥福をお祈り申し上げます。

「倉澤行洋先生との出会いから」
廣田吉崇
単に茶の湯が好きという私は、平成七年一月十七日の阪神淡路大

震災を契機として茶の湯の研究をはじめました。とはいえ、職業研究者でもない単なる事務職の地方公務員には、何をどのようにすればよいのかわかりませんでした。平成八年十二月にそのとき進めていました研究要旨を倉澤先生にお渡ししてご相談しましたところ、翌年二月十六日の沖縄県那覇市における茶の湯文化学会第六回研究会の場で発表してみますかというお声を掛けていただきました。そして平成八年十二月二十五日に神戸大学の研究室にお伺いし、研究発表についてのご指導をいただきました。ちょうどそのとき、のちに師事することとなる影山純夫先生が倉澤研究室を訪ねてこられました。それから四半世紀以上の歳月が流れましたが、その研究室の光景はいまでも脳裏に浮かびます。

はじめての研究発表は午後一時三十分からでしたが、朝会場に入り、会場の状況を確認して宿に戻

り、発表原稿を修正して本番に臨みました。そのころ咳がとれない状態ながらも続くことができましたが、四十五分間の発表のあいだ、いちども咳が出なかったことに我ながら驚いたことを覚えております。このとき「茶の湯点前比較研究の試み」と題して発表したことは、現在にいたる私の原点となります。ちなみにこの表題は倉澤先生に付けていただいたものです。

倉澤先生の「茶の修行は……『姿』を通して『心』を深める、即ち『姿から心へ』の修行でなければならぬ」(『増補藝道の哲学』七二頁)というお教えには、茶の湯において点前を研究する意義が示されているものと考え、心強く思っております。

平成十四年九月に倉澤先生を团长とする茶の湯文化学会研究会により、中国湖州市の陸羽関係の遺跡を訪ねました際、竹の産地である当地で入手した竹切れを持ち帰りました。そして花窓の長い花入

に切りまして、陸羽にちなんで「鴻漸」と銘を付けました。これをながめながら、倉澤先生の凜とした生前のお姿を思い起こしております。ころよりご冥福をお祈り申し上げます。

「茶文化国際交流の場に彩りの花を」

顧文

倉澤先生の訃報に接して、大変驚き、信じられないのは私だけではなく、中国で茶文化研究をしている倉澤先生の教え子と仲間も大変驚いたようである。

北京大学教鞭の職を終えたばかりの滕軍先生が「書山歲月師引路、学海年華師领航。教以至真師者心、誨以至善師者光。一言一語結桃李，一字一文堪流芳。山川草木有盡日，浩蕩師恩日月長」とのお言葉を恩師倉澤先生に捧げられた。また倉澤恩師から帰国前に贈って頂いた二品の写真を見せてくださった。一つは久松真一先生が書いた短冊

で、一つは心茶会で倉澤先生が初めて拵えた茶碗であった。

私は、日本で大学院に入った頃、久松真一研究をしている大阪府立大学先輩である顧錚さんの案内で、茶道の研究を目指していた私に倉澤先生の自宅での月一の勉強会に連れて頂いたのが、きっかけで倉澤先生の指導を受けるようになった。顧錚さんも倉澤先生の教え子であり、博士号の取得後、帰国し、復旦大学メディア学院の教職に就いていられる。修士を終えた私が博士コースへ進む中で、倉澤先生の茶文化国際交流への行脚に通訳兼ねてお供するようになった。浙江省杭州、径山、天台山、寧波と湖州をはじめ、陝西省法門寺、江西省廬山、山西省五臺山、福建省武夷山、広西省桂林などへ訪ねた時は、二年一度の中国国際茶文化研究会主催によるもので、時には茶の湯文化学会訪中研究会で、或いは世界禪茶文化交流大会、或いは寧波東アジア茶文

化研究センター主催によるものが

主であった。倉澤先生はこれらの研究会の発起人であり、役職も担当なされているから、大会日程中には、いつも途切れなく色んな人からお声がかかる。先生は茶文化国際交流の場に身を挺するだけではなく、中国茶文化を復興するため、ご自分の時間と寄付も惜しまなかった。一九九七年に五臺山会議中で江西省社会科学院の『中国茶文化文献集成』（仮題）の企画、出版に対する寄付の呼び掛けを聞いて、倉澤先生は自宅の阪神震災の被害にも拘わらず、後日、直接出向いて寄付金を手渡ししたり、また先生個人だけのものではないが、茶聖陸羽の第二の故郷である湖州の青塘別業を再建するため、茶の湯文化学会訪中団交流の一環として寄付を行ったりなさっていた。先生が育てられてきた国際交流の場に彩りの花が咲き、その花の色褪せないよう、外弟子としても日々先生の恩恵を汲みながらた

ゆまぬ努力をしていきたい。

例会

東京例会

（令和五年二月十一日）

「高橋箒庵と大正名器鑑」

齋藤康彦

文久元年、水戸藩士の四男として生まれる。維新後、家は困窮し、一三歳から四年間丁稚奉公に出た。明治一四年、中学校卒業目前に上京し慶應義塾に進学、時事新報社へ入社するも、富を築き趣味を楽しむ狙いで二〇年に退社する。

米国と英国を経て帰国し、二四年に渋沢栄一等の推挙で三井銀行に入る。大阪支店長の時、道具整理を命じた小林一三に茶の湯への興味を生じさせた。二八年、三井呉服店に転じ、益田克徳の茶会に招かれる。三一年、自宅に寸松庵を移築し、箒庵と号する。四四年

末、王子製紙を退職して実業界を去る。万象録と茶会記録の執筆、大正名器鑑となる茶道具名物図鑑編集を自らに課した。

大正七年に松平直亮郎と松江市で調査を開始する。翌八年は金沢、関西、東京での調査が本格化する。昭和三年に完成し告成会や完成慰労会は茶界でのネットワークを示した。短期間での完成は、茶人と茶碗に絞った点もあるが、多様な趣味で築いた人脈が機能した。だが、金子堅太郎に仲介を依頼した黒田家の博多文琳は落ちていた。収録家数は一五四家、松平直亮は九〇点で首位に立っているのは不昧の末裔の貫禄であろう。箒庵は所載した茶入八点と茶碗一点の名器を茶席で惜し気なく使用した。関東大震災を予見していたのか所載の茶入一五点と茶碗八点が焼失した。この間、何回か転居し、大正六年に赤坂区一木町に建設した茶庭伽藍洞が終の棲家となり、昭和一二一年二月一二日に七七歳

で没した。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

東京例会

令和五年十月十四日（土）

（会場…未定、会場とZoomによるハイブリッド開催）

午後二時～

「未定」

下村奈穂子

『茶経』に関する二、三のこと

岩間眞知子

令和五年十一月十一日（土）

（会場…未定、ハイブリッド開催）
午後二時～

「古伊賀―破格のやきもの―」展
について(仮)」

菅沢そわか

「裏千家の千猶鹿刀自の和歌につ
いて」

石塚 修

令和六年二月十七日(土)

(会場：未定、ハイブリッド開催)

午後二時

「益田克徳の茶とその周辺 その
五」

神保乃倫子・八木京子

「織田有楽について(仮)」

西山 剛

令和六年三月十六日(土)

(会場：未定、ハイブリッド開催)

午後二時

「未定」

荒井欧太朗

「未定」

峯岸佳葉

東海例会

(会場：昭和美術館会議室)

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

令和五年九月三十日(土)

「天目について」

長江惣吉

令和五年十一月二十五日(土)

「未定」

大槻倫子

近畿例会

令和五年八月二十六日(土)

(会場：同志社大学 今出川キャン
パス 至誠館S2)

午後二時

「茶入から考える『南方録』の成
立背景―『南方録』と『沢庵和尚
茶器詠歌集』のササ耳―」

岩田澄子

「松平伊賀守のコレクション形成」

宮武慶之

令和五年十一月四日(土)

(会場：大阪私学会館307号室)

午後二時～四時(一時半開場)

「藤田家と山本竹雲」

村田隆志

「藤田家と茶(仮)」

國井星太

*会場は、藤田美術館(大阪市都
島区)のすぐそば、発表と併せ
てご観覧をお勧めいたします。

当日ご覧いただける展示テーマ

は、「江」藤田家の茶会 大正

九年光悦会を中心に、「護」国

や信者を守護する仏教の道具・

「妖」おとなの絵巻」。

チケットは各自でご購入くださ

い。

*アクセスは、各施設のホーム
ページをご参照ください。

令和五年十二月九日(土)

(会場：同志社大学 今出川キャン
パス)

午後二時

「未定」

鈴木一弘

「黄梅庵と松永耳庵の茶の湯」

木村栄美

令和六年(未定)

(会場：同志社大学 今出川キャン
パス)

「未定」

八尾嘉男

「宗及茶湯日記(天王寺屋会記)」

に見る戦国期の茶の湯の諸相

2」

山田哲也

北陸例会

令和五年九月十六日(土)

(会場：福井県立一乗谷朝倉氏遺
跡博物館)

午後二時

「新博物館の朝倉館原寸再現展示
の案内(仮)」

熊谷透

令和六年三月十六日(土)

(会場：富山市佐藤記念美術館)

午後二時～

『生成—Life is beautiful』展 富山の現代工芸作家について(仮)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)
午前十時～正午

金沢例会

令和五年八月二十七日(日)

(会場：金沢市神宮寺町 蓮寺持明院)

午前九時半～

呈茶を伴う講演会

『明治期の茶人交友・加越能』

平木孝志

令和五年九月三日(日)

令和五年九月二十四日(日)

(会場：金沢ITビジネスプラザ 武蔵)

午後一時半～

『茶書は語る(仮)』

原田茂弘

令和五年十二月十日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)
午前十時～正午

講演会(詳細未定)

令和六年三月二十四日(日)

高知例会

令和五年七月二日(日)

正午～午後四時

『地域の茶人に学ぶ II』

茶の湯関係文献を読み所感の発表

午前十時～正午

茶室)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

令和五年十二月十日(日)

『地域の茶人に学ぶ I』

茶の湯関係文献を読み所感の発表

午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

令和五年九月三日(日)

絡ください)

会費 五百円(参会希望者はご連絡ください)

薄茶席 席主 二名

正午～午後四時

ポジウム』

会の研究発表をテーマとしたシンポジウム』

『茶の湯文化学会二〇二三年度大会の研究発表をテーマとしたシン

午前十時～正午

茶室)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

軽食茶事 席主 三名

会費 二千円(参会希望者はご連絡ください)

令和六年二月二十五日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

『地域の茶人に学ぶ III』

新刊紹介

『石州流大口樵翁茶書』

熊倉功夫解題 宮帯出版社

定価一九、八〇〇円(税込)

『装いの美術史 織りと染めが彩

なす服飾美』

河上繁樹著 思文閣出版

定価五、五〇〇円(税込)

『香が語る日本文化史 香千秋』

畑正高監修 香老舗 松栄堂

定価一、九八〇円(税込)

『茶人叢書』細川三斎「天下第一
じかき人」の実像』

福原透著 宮帯出版社

定価四、七三〇円(税込)

お知らせ

令和五年五月九日、戸田勝久参
与がご逝去されました。戸田先生
には長年にわたり、本学会をお支
え、お導き頂きました。ここに慎
んでご冥福を心からお祈り申し上
げます。

※二〇二三年度年会費を払込み
くださいますようよろしくお願い
いたします。

